

可茂農林事務所の普及活動状況 令和6年11月29日現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■集落営農組織 ファームこしはら集落営農組合設立

10月29日、東白川村の集落営農組織の無い地域において、地域農業を担う任意組織「ファームこしはら集落営農組合」の設立総会が越原センターで開催された。

組合設立は数年前から検討され、小規模ではあるものの地域の農地を守る組織が必要との意見がまとまりこの日を迎えた。隣接する複数の集落の組合員9名が、遊休農地の解消と地域農業の経営改善を目的に、水稻栽培の作業の標準化と共同化に取り組むこととしている。

農林事務所では、組合設立後の安定した運営に向けて、関係機関と連携しながら支援していく。

(地域支援第二係)



【設立総会の様子】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■小麦 令和7年産(令和6年播種)小麦栽培支援

令和7年産(令和6年播種)小麦(品種:さとのそら)の栽培は、可茂管内で8経営体が行い、計40.5haが見込まれている。播種は10月下旬から始まり、11月にはほぼ終了した。

農林事務所は巡回により播種状況を確認し、排水対策(額縁やほ場内明渠の設置)や雑草対策の徹底などの助言を行った。11月は降水日も少なく、出芽は順調となっている。

今後は定期的に調査を行い、生育状況を把握するとともに収量・品質向上へ向けた支援(穂肥、赤かび病防除、適期収穫など)を行う。



【播種作業中の生産者】

(地域支援第一係)

■美濃加茂市堂上蜂屋柿振興会 出荷規格を周知、出荷量は前年並みを見込む

美濃加茂市堂上蜂屋柿振興会(会員56名)は、堂上蜂屋柿の原料となる生柿出荷を控えた10月29日に生柿出荷者研修および第一次加工研修を、また干柿加工の終盤に近づいた11月27日に第二次加工研修をそれぞれ開催した。今年の生柿は、夏の猛暑による日焼け果の発生と果樹カメムシによる果実への吸汁被害がみられたため、研修で出荷規格の周知徹底を図った。また衛生的な加工所管理や干柿のカビ対策、手もみやほうきがけ等について説明があった。農林事務所からは、日焼け果や着色の進捗、果樹カメムシ発生状況について説明した。

研修後は会員同士で干柿加工方法について意見交換する姿が多くみられ、より高品質な干柿づくりに対する熱意を感じた。今年は高温傾向が続いたため着色・追熟に時間がかかり出荷始めは数量が少なめとなりそうだが、全体の出荷量はほぼ前年並となる見込みである。12月1日から販売予約開始、16日から干柿出荷開始予定であり、農林事務所では今後も振興会活動に対し支援を継続していく。

(地域支援第一係)



【加工研修会の様子(規格の確認)】

■果樹 山之上果樹フルーツ塾で基礎講座を開催

山之上果樹フルーツ塾は、令和5年度に山之上果実協同組合・美濃加茂市・県が連携して立ち上げた就農研修拠点で、果樹農家になるための2年間の研修を行っている。圃場での実習を中心に座学もあり、定期的に果樹基礎講座を開催している。11月6日には、山之上果実協同組合会議室で今年度6回目となる基礎講座を開催した。

今回の内容は、カキの栽培管理とGAP（農業産工程管理）についてで、農林事務所が説明を行った。また、山之上果実協同組合からナシの高温障害についての説明や、農薬メーカーと肥料販売業者からそれぞれ資材の紹介があった。

講習会には、研修生の他、山之上果実協同組合の若手農業者等にも参加を呼びかけ、7人の参加者があった。農林事務所では、今後も果樹基礎開催をするなど、研修生への支援を継続していく。

（園芸産地支援係）



【果樹基礎講座の様子】

■夏秋トマト トマト3Sシステムで2.5倍の出荷量を実現

農林事務所では今年度、美濃白川夏秋トマト部会の産地出荷量増大に向けた取り組みの一つとして、3Sシステム(※)の導入と栽培技術の支援を行ってきた。

当該部会に3Sシステムが導入されるのは初めてで、システムの設計や調達、施工への助言を行うとともに、栽培開始後は日常の管理だけでなく、本システムの要である給排水管理について頻繁に助言を行った。その結果、10a当たりの出荷量は25.3tと部会平均の2.5倍を超えることができ、導入者は次年度に規模を拡大することとなった。

農林事務所では、今後も部会員への3Sシステムの導入提案を行うとともに、産地出荷量増大に向けた様々な技術支援を継続していく。



【管理作業を行う生産者】

※3Sシステム（夏秋トマト隔離型培地耕：Small amount Separated cultivate-system for Solanaceae）
岐阜県が開発した夏秋トマトの養液栽培システムで、従来の土耕栽培と比較して10aあたり2倍の20tの収穫が可能となる。

（園芸産地支援係）